

# 「乳巖治験録」中の4枚の手術図に関する一考察

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

受付：平成27年11月16日／受理：平成28年6月3日

**要旨：**1804年に行われた藍屋 勘の乳癌手術の図は「乳巖治験録」の中で図2-図5として言及されている。華岡青洲の弟子の一人が太陽光を遮らないように患者の足元に位置して描いたと思われる。「乳巖治験録」には原図が欠落していたため、呉秀三は復刻時に他の写本から該当する図を転写したが、これらは患者の左側面から見た図である。杏雨書屋の「乳岩図」の書写年は不詳であるが、正面から描いた図であり原初の図を反映している。フラワーヒルミュージアムが所有する華岡家由来の「乳岩図・素描」は16枚の素描を取めるが、これを基にして「乳岩図」、「乳巖治験録」の原図が作られた。

**キーワード：**華岡青洲，呉 秀三，乳巖治験録，乳岩図，乳岩図・素描

## 1 はじめに

華岡青洲の業績の中で最も高く評価されているのは、全身麻酔薬「麻沸散」の開発とその臨床応用であった。すなわち「麻沸散」を駆使してそれまで不可能であった各種の選択的手術を行ったことであった<sup>1,2)</sup>。1804年10月13日に行われた最初の全身麻酔下の手術が和州五條駅の藍屋 勘の左乳房の乳癌腫瘍摘出術であったことは余りにも有名であり、その模様は天理図書館に所蔵されている「乳巖治験録」<sup>3)</sup>によって知られている。これは「華岡青洲先生及其外科」<sup>4)</sup>の著者呉 秀三が旧蔵していた写本であった。

この「乳巖治験録」<sup>3)</sup>の末尾に青洲は「同志に示す為に図を作り之を識すと云うのみ」(原漢文)と記している。これから推察すると、青洲は仲間や門人に供覧するために記念すべき最初の全身麻酔下の手術症例の正確な記録を残そうと文章に加えて図も作ったことが明白である。呉は「乳巖治験録」<sup>3)</sup>をその著の中で復刻したが、しかしその復刻について重大な疑問が存する。このことについては旧著で詳しく論じたのでここでは触れな

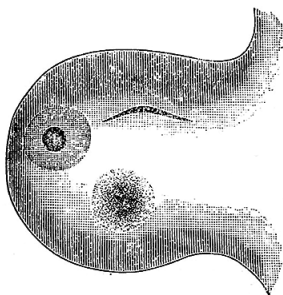
い<sup>5)</sup>。呉は同時に「乳巖治験録」の4枚の図も復刻した<sup>6)</sup>。これらの図を詳細に検討してみるとその復刻に関しても疑義のあることが判明したが、これについて考察を加えた論考はこれまで見当たらない。「乳巖治験録」<sup>3)</sup>に関しては未だ多くの未解決の問題が残されているが、本稿では図の復刻の問題と「乳巖治験録」<sup>3)</sup>中に言及されている手術図の成立に関して焦点を絞って論じたい。

## 2 呉 秀三による「乳巖治験録」の手術図4図の覆刻に対する疑義

呉は「華岡青洲先生及其外科」<sup>4)</sup>の中で「乳巖治験録」<sup>3)</sup>を復刻したが、写本の一部を写真版としても掲載した<sup>7)</sup>。しかしその一部は合成写真であった。さらに図1に示したような4枚の図も写真版ではなく図版として掲載した<sup>8)</sup>。呉の著書の第138-141図である。図の説明には「乳巖治験録ノ第二図」-「乳巖治験録ノ第五図」などとあって、これらの図が写本の「乳巖治験録」<sup>3)</sup>に付随していた原図であるとの表記をしている。しかしこの写本が呉の手元にあった時には、これらの図はすでに失われていたと推察される。というのは現

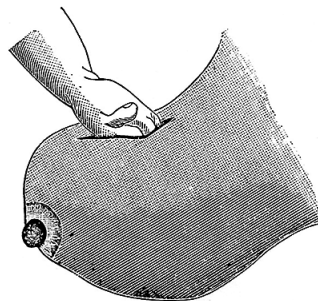
## 八 十 三 百 第

圖二第ノ録驗治癒乳



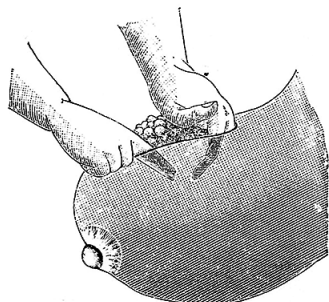
## 九 十 三 百 第

圖三第ノ録驗治癒乳



## 十 四 百 第

圖四第ノ録驗治癒乳



## 一 十 四 百 第

圖五第ノ録驗治癒乳

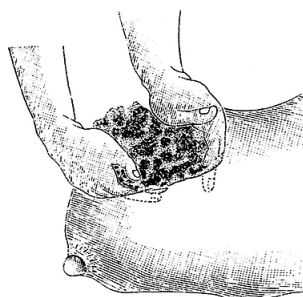


図1 呉が「華岡青洲先生及其外科」の中で示した「乳巖治験録」の4図

在，天理図書館に所蔵されている「乳巖治験録」<sup>3)</sup>にはこれらの図は欠落しているからである。呉から天理図書館への所有権移動の詳しい経緯は不詳であるが，少なくとも天理図書館がこの写本を購入した時には図が失われていたことは確かである。

このことを裏付ける証拠がある。呉が入手した「乳巖治験録」<sup>3)</sup>に図が欠落していたために，呉は文中で言及されている「二之図」から「五之図」までの4図を他の複数の写本から転載したと考えられる。その根拠は次のとおりである。呉のいう「乳巖治験録」<sup>3)</sup>の「第二図」と「第五図」は図1の左上と右下に示したように乳房の基部は境界がなく，乳房の中央は白のままである。一方，「第三図」と「第四図」では図1の右上と，左下に示

したように乳房の基部の境界は明確に描かれ，乳房全体が黒く塗りつぶされている。乳量の描き方，手の陰影も「第三図」，「第四図」では近似しているが，「第五図」では手の甲まで陰影が及んで「第三図」，「第四図」とは異なっている。同一の写本で乳房の形状をこれだけ明瞭に異なった描き方をしているとは考えられない。つまりこれら4図は「第二図」と「第五図」，「第三図」と「第四図」の2群，さらに細かく見ると「第二図」と「第五図」では乳房の形の描き方が異なっているので，このことを考慮すると，これらの図は少なくとも2種類以上の異なった写本から模写されたことが強く示唆される。呉がその著書の中で図巻の正本として示した「華岡家治験図巻第一」<sup>9)</sup>は東背山腰端月が1838年に模写した図巻で華岡家本

家に所蔵されていたが、この中に見られる両手を切開創に挿入した図<sup>10)</sup>は、呉が復刻した「第五図」とは、挿入した指の長さ、乳房の形などの点で明らかに異なる。このことは呉が「華岡家治験図巻第一」<sup>9)</sup>以外の写本から図を採用したことを物語っている。

一方、呉がその著で示している他の図、例えば「缺唇」（和州野原村小林伊八娘十二歳<sup>11)</sup>や「缺唇」（紀州那賀郡粉河邑大工<sup>12)</sup>は「華岡家治験図巻第一」<sup>9)</sup>の原図をほぼ正確に再現しており、「摂州清右衛門妻ノ乳巖ヲ治療ノ図」（一）-（三）<sup>13)</sup>の原図は現在、京都大学附属図書館に所蔵されている富士川文庫の「華岡氏治術図識」<sup>14)</sup>に見られるが、それをほぼ的確に描いている。つまり呉の著書の図は諸写本の原図を比較的忠実に再現したものであることが理解される。このようなことから呉は「乳巖治験録」<sup>3)</sup>の4図に関しては、少なくとも2種以上の異なった写本から該当する図を選んでそれらを忠実に復刻したと考えられるが、今直ちにそれらの基となった写本を特定することは困難である。

### 3 「乳巖治験録」中の図の説明文

「乳巖治験録」<sup>3)</sup>中4枚の図の説明がなされている文章は5丁表に見られるが、乱丁があるため正しくは6丁表である。その条の漢文を読み下し文にすると次のようになる。

時に古呂牟志津寿（コロンメス、krom mes、湾曲したメスの意一著者）を以て、二之図の如く核上三寸許を豎割す。出血少なからず。手術を以て之を止める。而して三之図の如く一指を其の創口に入れ<sup>15)</sup>、其の核を候う。核、上下の肉に附属して離れず。因りて四、五之図の如く左右の指を入れ、核を肉より排離す<sup>16)</sup>。時に系筋有り。則ち古呂牟志津寿をさし挟んで之を切る。

この記述から「二之図」は乳房に切開創を加えた図、「三之図」は切開創に一指を挿入した図、そして「四之図」と「五之図」は創口に左右の指

を入れて腫瘍を周囲の組織から剥離しようとしている図であることが明らかである。

上述の記述では「図之一」および「図之六」以降の図についての言及がない。流布している図譜では、上に述べた4図の他に、藍屋 勘の坐像、メスと鋏の図、そして摘出腫瘍の2個の図（真上と斜上から見た腫瘍塊の図）、腫瘍を縦割りにした2個の図の計4図なども掲載するが、「三之図」から「五之図」までは皆同じ図柄である。したがって「図之二」から「図之五」までの図は大約呉が示した図と同様なものであったことは間違いないと言ってもよい。多くの写本では図に番号が附されていないので、確定的とは言えないが、東京大学図書館鶯軒文庫の「奇患図」<sup>17)</sup>、内藤記念くすり博物館所蔵の「華岡塾瘍着色図」<sup>18)</sup>では「藍屋 勘の坐像」、「メスと鋏」には番号がなく、「其二（切開創の図、以下括弧内は著者による）」、「其三（一指挿入の図）」、「其四（両手挿入の図）」、「其五（両手挿入の図）」、「其六 全形（腫瘍の上からと斜側面から見た図）」、「其七 縦断見中（摘出腫瘍の縦割の図）」の計8図が収載されている。アメリカのWood Library-Museum所蔵の「瘍科神書」<sup>19)</sup>では最初に「藍屋 勘の坐像」、次に「其一（切開創の図）」、「其二（一指挿入の図）」、「其三（両手挿入の図）」、「其四（両手挿入の図）」、「其五 全形（摘出腫瘍塊の上と斜側面から見た図）」、「其六 縦断見中（摘出腫瘍の縦割の図）」の7図である。このようなことから藍屋 勘の手術時には少なくとも8図以上の画が描かれていたものと推定される。そうすれば最初の「一之図」は「藍屋 勘の坐像」か「メスと鋏の図」のいずれかということになる。上に引用した「乳巖治験録」の文章の直前は次のようになっている。

冬十月十有三日朝、我が麻沸散を服す。少頃、正気恍惚（「恍」は「恍」の誤り一著者）として人事を識らず。終（「周」の誤り一著者）身麻痺して痒痛を覚えず。

勘が麻沸散の服用によって意識を消失した状態を描写した条である。この部分を図にするのであ

れば、意識を失って布団に横たわっている勘でなければならぬ。ところが多くの図譜では勘の坐像が描かれている。したがって勘の坐像は当初描かれた図ではなくして、後で付け加えられたと推察される。青洲は「乳巖治験録」<sup>3)</sup>を口述し(口述の痕跡は「恍恍」を「恍恍」,「周身」を「終身」と同音の誤字が用いられていることで証される一著者)筆記させたが、青洲の手元にはこれらの図があり、それを見ながら青洲は口述したはずである。しかし「図之一」,「図之六」-「図之八」は「乳巖治験録」の口述の際、手術に関連して説明されなかったもので、文章としては残らなかったであろう。「乳巖治験録」<sup>3)</sup>の本文に即して考えれば、手術の説明に必要な図は4枚の図だけであったともいえる。これが「乳巖治験録」<sup>3)</sup>の中で「図之一」,「図之六」-「図之八」が言及されていない理由であろう。

このように考えると、敢えて「一之図」を入れるとすれば、「一之図の如く」に先行する文章、または後続する文章は「藍屋 勘」ではない。「冬十月十有三日朝、一之図の如き藍屋 勘は我が麻沸散を服す。」とか「少頃、一之図の如き藍屋 勘は正気恍恍(「恍」の誤り一著者)として人事を識らず。」ではおかしい。つまり「藍屋 勘」では続き具合が悪いのである。一方、「古呂牟志津寿」であれば、「時に、図之一の如き古呂牟志津寿を以て、二之図の如く核上三寸許を堅割す。」となり、意味も良く通り文章の流れも良い。図は手術の模様を他者に伝達するためのものであるから、藍屋 勘の坐像ではあり得ず、どうしても手術に直結することでなければならないと考える。また「一之図」が「藍屋 勘」であっても、「古呂牟志津寿」であっても、上に引用した「冬十月十有三日朝」以前の文章に手術に関連して「一之図」が入るべき箇所は見当たらない。このように推察すると「図之一」は「メスと鉗」の図であると推定される。但し「メス」は「古呂牟志津寿」として文中に出てくるが、「鉗」は出てこない。但し手術に際して準備したことは間違いないので描かれたのであろう。この問題については後述する。「乳巖治験録」の文章に準拠して図を考察す

れば以上ようになるが、当初作られた図は8図以上と考えられるが、その製作過程を示唆する重要な一写本が存在する。

#### 4 杏雨書屋所蔵の「乳岩図」について

公益法人武田科学振興財団杏雨書屋に「乳岩図」<sup>20)</sup>と題する写本がある。乾々斎書屋本で、茶色の表紙は後に作られた。図2の上欄の一番左に示したように、表紙には「乳岩図 全」と墨書され、右下に「藤浪氏蔵」の印が押され、その左に「錦谷藤浪積善 所蔵」と2行に墨書されている。書写者や書写年代は不詳であるが、決して新しい写本でないことだけは確かである。この「錦谷藤浪積善」がだれかを今直ちに特定できない。藤浪剛一の父「藤浪万徳」<sup>21)</sup>ではないかと示唆されるが、号などが一致しないので、この問題については後日を期したい。万徳が青洲の高弟三村玄澄<sup>22)</sup>の弟子であったから、万徳が青洲の医術に関する写本を所蔵していたとしても全く違和感がなく、むしろ当然のことであったと考えられる。全5丁の内、本稿で問題にしている4図に関連した1丁表から3丁表までの5図を図2の上欄に示した。その内容は以下の通りである。

- 1丁表 癌の部位を示した乳房の図。右上に「乳岩図」とある。
- 1丁裏 病巣の左側の切開創が入った図。
- 2丁表 左手の指を切開創に挿入した図。
- 2丁裏 右手にメスを持ち、両手を切開創に挿入した図。
- 3丁表 両手を切開創中に入れ、乳癌腫瘍を周囲の組織から剥離している図。

この写本では計10図が描かれている。上欄の1丁裏から3丁表までの4図は呉が覆刻した図2-図5に相当する。この写本で特徴的なことは「藍屋 勘の坐像」が欠落していること、切開が加えられる前の乳房の図があること、摘出腫瘍塊とその縦割の図がそれぞれ半丁ごとに描かれていること、鉗が描かれずメスのみが描かれていることであろう。後年付加されたと考えられる「藍屋 勘



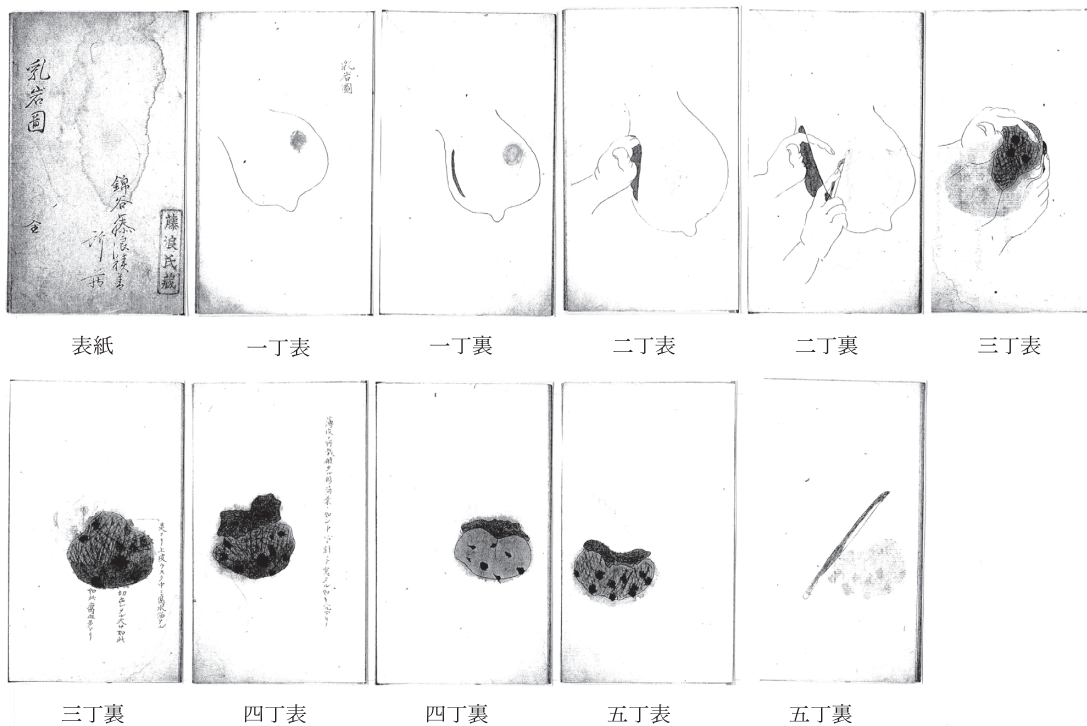


図2 「乳岩図 全」の表紙から五丁裏までの10図（杏雨書屋所蔵。許可を得て転載）

の坐像」が欠落していることは、この写本が原初の姿を伝えているのではないかということを示唆する。また「メス」のみが描かれていることも重要で、これもこの写本が原初の姿を伝えている根拠の一つになる。

しかしこの写本はさらに重要なことをわれわれに伝えている。それは1丁表から3丁表までの5図はすべて患者の正面ないし斜め下から見た乳房の図である。一方呉の覆刻した「第二図」-「第五図」では図1に示したようにいずれも患者の左側から見た図となっている。つまり「乳岩図」<sup>20)</sup>の図を時計回りに90度回転させると呉の図になるのである。このことを考えると、当初の画は患者の足元に立った画者が正面ないし斜め下から観察した様に描いたことが強く示唆される。恐らくはじめ「乳岩図」<sup>20)</sup>のように描かれたのであったが、後年、模写の過程でより理解しやすいように時計回りに90度回転させた画になったのであろう。さらに「乳岩図」<sup>20)</sup>2丁裏の図は右手にメス

を持っているので青洲が右利きであり、乳房との位置関係から青洲が患者の右側に坐して手術を行ったことが分る。

春林軒は患者数、門人数の増加によって拡張されたことが知られている<sup>23)</sup>。拡張の時期は明らかでないが、門人数から見て1810年代になってからであろう。先年の春林軒の移築に際して遺構の発掘調査が行われ、拡張前の第一期の遺構と拡張後の第二期の遺構が存在することが明らかになった。発掘調査によれば、第一期の建物は18世紀末から19世紀初頭まで存在していたものだろうという。基石から推定すると、もちろん第一期の母屋の規模は小さいが、第二期のそれとほぼ同じ位置にあったと思われる。呉はその著の中で春林軒の母屋の見取り図を示しているが、これは第二期の建物である(図3)<sup>24)</sup>。藍屋 勘の手術は第一期の建物で行われたことは間違いないが、その時の診察室、手術室の位置はもちろん明らかでない。しかし第一期の基石から推察して図3に示し

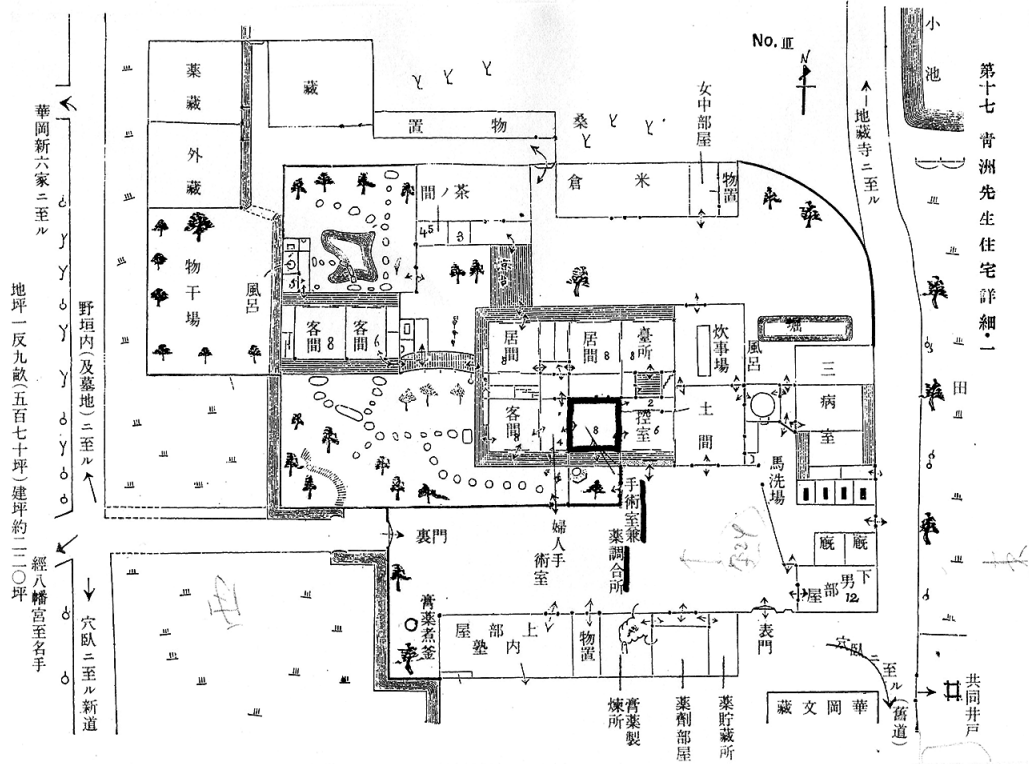


図3 春林軒（第二期）の平面図。（文献4から）。□の所が手術室兼薬劑調合所。

た第二期の手術室（診察室）と同様に、位置は多少ずれるであろうが、南に面した明るい部屋であったとしても大きな過ちではあるまい。奥まった薄暗い室で診察し、手術をすることはしなかったと思われるからである。患者数の増加に対応するため拡張された第二期の建物では手術室（診察室）は八畳間となっているが、第一期の建物ではこれよりも狭い六畳間であった可能性が高く、少なくとも八畳間より大きい部屋ではなかったことは間違いない。また東側に連なる控室（その東側は土間で、患者が入ってくる入口）も部屋の大きさは別にして位置的関係は同じであったと考えられる。第二期の建物では手術室の西側に「婦人手術室」があるが、第一期でこの部屋があったかどうかは不明である。助手たちや準備のことを考慮に入れば何かしらの室があったと推察される。この東西に連なる控室、手術室などの位置的関係は手術の助手、その他の介助者たちの動線を考え

る上で重要である。

勘は朝に「麻沸散」を服用した。しかしその正確な時間は分らない。「麻沸散」の作用発現時間から推定すると、手術が始まったのは朝の9時から11時頃で、手術が終了したのは11時から13時頃と見て大過ないであろう。1804年10月13日（新暦の11月14日）の平山における日の出、日の入りの時刻と方角（360度方式、つまり北は0度か360度、東は90度、南は180度、西は270度と表現する）は、日の出は午前6時31分で方向は112度、日の入りは午後4時56分で248度であった<sup>25)</sup>。午前11時43分には真南から光が差しこんでいたはずである。図4に当時の日の出、日の入りの方向を示した。

以上の光の入ってくる方向を考慮しながら、勘の頭の方向について検討する。上述したように画者は勘の足元の方に立って描いたと考えられるので、これを念頭に考察すると、頭を東に向けた場

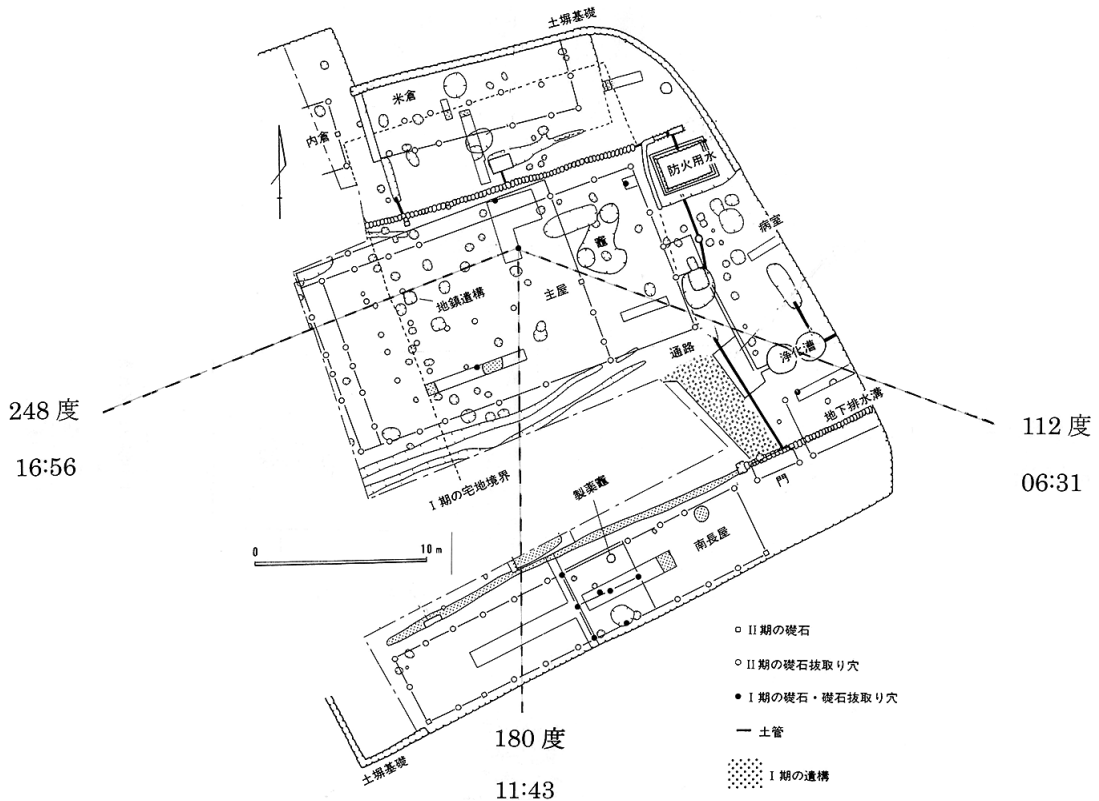


図4 1804年10月13日（新暦11月14日）の春林軒における日の出と日の入りの方向と時刻。  
（図面は文献23による。一部改変）

合、術者の青洲は勘の右側に座ることになり、南からの光は妨げられず手元が暗くならない。画者も西、つまり勘の足元に立つことになり、光を遮ることもなく、正面ないし斜め下からの図を描く上で問題ない。勘の頭が西に位置した場合は、青洲は勘の右側、つまり南に背を向けて座ることになり、自ら光を遮ることになって手元が暗くなり具合が悪い。ただし画者は東に位置することになり問題はないが、頭を西に向けた位置の可能性はないとみて差し支えない。頭を南北に向けた場合、東側の控室との動線を考慮に入れると、このような位置をとった可能性は低いと推察される。手術時の部屋における助手や手伝いの人たちの動線の問題は一般の人たちが考える以上に非常に重要である。頭を北に向けた場合、画者は南に位置して光を遮ることになるので、このような位置は採らなかったと考えられる。頭を南に向けた場合

の可能性を全く排除することは出来ないが、東に向けた場合よりも可能性は低いと思われる。この場合、画者は北に位置するので光を遮らずに、勘の足元から見た図を描くことは出来る。結局、勘の頭は東ないし南に向いていたと思われるが、いずれの場合も画者は勘の足元に位置することが出来て、正面ないし斜め下からの図を描くことが出来る。控室との動線を考慮に入れると、東向きであった可能性が最も高い。

## 5 なぜ左側から乳房を見た図が作られたのか

以上述べたように「乳岩図」<sup>20)</sup>ではいずれも乳房を患者の正面ないし斜め下から見た図が描かれたのであったが、それらを基に後年作られたと思われる多くの図譜では、呉の「第二図」-「第五図」に見られるように、乳房の左側から描いた図に変



化している。つまり前述したように元の図を時計回りに90度回転させた画に変化した。恐らく90度回転させた図の方が、見る者にとって乳房の立体感が感じられ、切開創中に挿入されたメスや指と腫瘍の位置関係を理解しやすかったからであろう。そして一旦分りやすい図譜が作られると、それが次々と模写されていったものと思われる。

## 6 「乳岩図・素描」による図の製作過程

現在、「医聖華岡青洲顕彰会」に所蔵されている史料の一つに「乳岩図」<sup>26)</sup>がある。前述した杏雨書屋所蔵の「乳岩図」<sup>20)</sup>と紛らわしいので、本稿ではこれを「乳岩図・素描」と仮称しておく。図5にその表紙を示したが、「乳岩図」の下に「六組 十六枚」とあるように大小さまざまな紙に図を描いたもので、図の内容から考えて藍屋 勘の手術の図であることは間違いないが、これらが作られた素描のすべてであるかはわからない。年紀を示す記述や画者の名前も見られない。また図が一冊の画帳に纏められて描かれたのでない。しかしこれらの図は筆勢から見て同一人によると思われる。

これらの紙片は後年、無造作に綴られたと思われる、順序も上下も全くばらばらである。一部の紙片に「二」、「三」、「六」などの数字も見られるが、この数字と図の内容の時間的経過、つまり手術の進行順序とは一致しない。「乳巖治験録」の原図が完成するまでに様々な素描が描かれたようで、例えば摘出腫瘍塊を2個に縦割した図については、腫瘍本体の形状だけを単純に線で描いた図、本体に付着した組織の形の線を付け加えた図、腫瘍表面の脈絡を付け加えた図、最後に表面が脈絡で覆われた図と4枚描かれている。呉の示した「第四図」と「第五図」に関連して示したのが図6に示した4枚の図で、これらはばらばらに描かれている。これらを原初の線だけを残すようにコンピュータで処理して輪郭だけを示してある。呉の「第四図」、「第五図」、そして「乳岩図」<sup>17)</sup>の「二丁裏」、「三丁表」の図に相当する。いずれの画でも両手の間にあるはずの腫瘍塊が未だ描かれていないので、完成図ではないことが分る。完成した

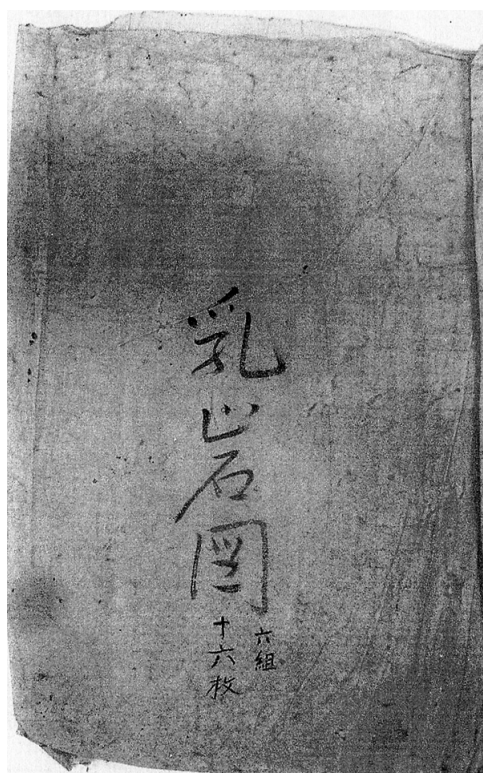


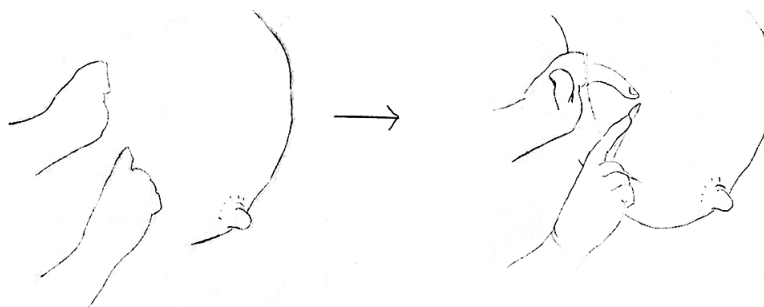
図5 「乳岩図・素描」の表紙。

図は「乳岩図・素描」には欠落している。「乳岩図・素描」に藍屋 勘の坐像、メスと鉗の図が含まれていないことは、これらの図は手術当日には描かれなかったということを示唆している。これらの図の製作過程で華岡青洲がどのような指示を出し、関与したかは興味を引く課題であるが、これに答えるために必要な史料は現在の時点では皆無である。

以上述べたことから、藍屋 勘の乳癌摘出術の際、手術の進行に伴って様々な素描が作られたが、それらを基に最終的に現在われわれが見るような図が完成された。杏雨書屋の「乳岩図」は当初作られた「乳巖治験録」の図を反映していると思われる。画者は患者藍屋 勘の足元に位置して図を描いたと推察される。



第四図



第五図

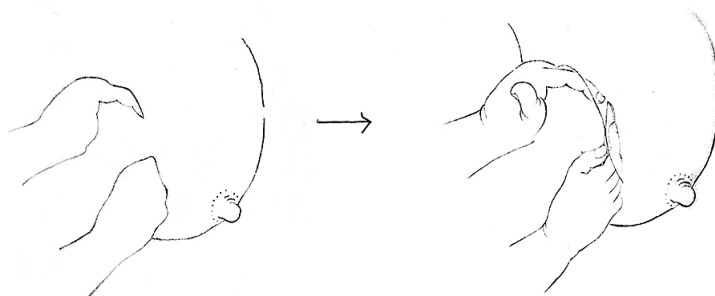


図6 「乳岩図・素描」から、画像をコンピュータ処理して見やすくしてある。

## 参考文献および注

- 1) 小川鼎三. 医学の歴史. 東京：中央公論社；1964. p. 151-3.
- 2) Matsuki A. *Seishu Hanaoka and His Medicine – A Japanese Pioneer of Anesthesia and Surgery –* (2nd ed.). Hirosaki: Hirosaki University Press; 2012. p. 45-68.
- 3) 松木明知. 華岡青洲の新研究. 弘前：松木明知；2002. の巻頭にカラー写真で覆刻してある.
- 4) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京：吐鳳堂；1923.
- 5) 文献3. p. 107-43.
- 6) 文献4. p. 260-8.
- 7) 文献4. p. 261, 263, 264, 266.
- 8) 文献4. p. 265-6.
- 9) 文献4. p. 388-99.
- 10) 「外科治術図画」. 堀内 信編. 南紀徳川史巻之百六十 (学制第三). 和歌山：南紀徳川史刊行会；1933. p. 218.
- 11) 文献4. p. 302.
- 12) 文献4. p. 303.
- 13) 文献4. p. 218-9.
- 14) 京都大学附属図書館富士川文庫所蔵 (請求番号 和大・ハ・八三)
- 15) 原文の「而入一指如三之図於其創口」が「而入一指於如三之図其創口」と訂正されているが、訂正前の文章が正しいと思う.
- 16) 原文は「排離核之與肉」で「核と肉を排離す」と読むのだろうが、原文は「之」が入ってすっきりしない.
- 17) 東京大学附属図書館鶯軒文庫所蔵 (V11 936)
- 18) 内藤記念くすり博物館所蔵 (番号 35733)
- 19) Wood Library — Museum 所蔵. (WLM Call Number: WB369 H197 1840RB, Accession No.: RB0909) 「瘍科神書」の題箋は後に誤って付けられたもので、内容はいわゆる「奇患図」で、文章は含まれていない.
- 20) 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵. (乾 4502)
- 21) 市古貞次他編. 国書人名事典 (第四巻). 東京：岩波書店；1998. p. 183-4.
- 22) 文献4. p. 178-82.
- 23) 那賀町役場. 医聖華岡青洲春林軒跡発掘調査資料. 那賀：那賀町役場；1996.
- 24) 文献4. p. 71.
- 25) [www.hucc.hokudai.ac.jp/~x10508/Srss2.html](http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~x10508/Srss2.html) (暦情報データベース. 2015年10月30日閲覧)
- 26) 医聖華岡青洲顕彰会編. 「医聖華岡青洲顕彰会所蔵品目録」(那賀, 発行年不明)には「乳岩図」の名は見出されない.

# A Consideration of Four Illustrations of Surgical Operation Referred to in *Nyugan Chiken Roku*

Akitomo MATSUKI

Department of Anesthesiology, Hirosaki University Graduate School of Medicine

Four illustrations of a breast cancer operation of Kan Aiya in 1804 are referred to as Figures 2 to 5 in the manuscript *Nyugan Chiken Roku*. One of Hanaoka's disciples depicted them, standing at the patient's feet, in order not to block the sunlight. Thus, the drawings may have been illustrated as viewed from the front. Because the manuscript lacks the original illustrations, Kure transcribed them from other unidentified manuscripts to reproduce them in his monograph *Seishu Hanaoka and His Surgery*, but they were illustrations viewed from the side, suggesting that they were different from the original figures. A manuscript in the Kyou Library titled *Nyuganzu* is considered to convey the original style because its illustrations are presented from a front view. Sixteen sheets of drawing, which are in the possession of the Flower Hill Museum, are considered rough sketches for the original illustrations because they are of Hanaoka's family provenance. Careful examination of these manuscripts and the rough sketches leads to further elucidation of the mysteries of *Nyugan Chiken Roku*.

**Key words:** Seishu Hanaoka, Shuzo Kure, *Nyugan Chiken Roku*, *Nyuganzu* Original drawings of *Nyuganzu*